

はじめに ー日本の「KAIZOKU」の歴史・文化を明らかにするためにー

宣教師ルイス・フロイスから「日本最大の海賊」と呼ばれた村上海賊のストーリーが平成28年4月に文化庁の日本遺産に認定されました。村上海賊魅力発信推進協議会では、同年から平成30年度にかけて、文化庁の支援を得ながら村上海賊と全国の海賊・水軍などと呼ばれる海の勢力との比較研究を行って参りました。

調査研究の目的は、中世日本の海賊と城の特徴を明らかにし、そもそも「パイレーツ」とは全く異なる日本の「海賊 KAIZOKU」の歴史や文化を世界に発信するための基礎的な研究にあります。その成果は、平成30年度にシンポジウム・巡回展・調査報告書として公開を始めました。

このパンフレットは、調査研究成果をよりわかりやすく紹介するために作成しました。村上海賊と同様に、宣教師が出会った「西国の海賊」、とりわけ「フロイス日本史」に頻繁に登場する九州西岸の海の勢力にスポットをあて、村上海賊との共通点や違いを紹介します。

Contents

1. 宣教師がみた西国の「海賊」・・・1
2. 瀬戸内海の「海賊」と城・・・3
3. 宣教師がみた九州の海の勢力と城・・・7
4. 海の勢力と流通・・・11
5. 津々浦々の「海賊」・・・15
6. 「海賊」の終焉・・・16

■本書は、日本遺産魅力発信推進事業で作成した調査研究成果報告パンフレットです。

■本書の執筆・編集は田中謙（今治市教育委員会宮窪地域教育課・今治市村上水軍博物館学芸員）が行い、大上幹広（同学芸員）、松花菜摘（今治市教育委員会文化振興課）、西井亨（尾道市文化振興課学芸員）の協力を得ました。

■本書掲載写真の無断転載はご遠慮ください。



横瀬浦のルイス・フロイス像
（一社）長崎県観光連盟提供

1. 宣教師がみた西国の海賊

日本にやってきた宣教師

宣教師とは、宗教をのべひろげること、そして宣教師とは、宣教に行く人々のことで、特にキリスト教の伝道に従事する司祭・牧師・修道者・信徒のことを言います（『広辞苑』）。

日本にやってきた最初のキリスト教宣教師とされるのが、有名なフランシスコ・ザビエル。1549年のことです。その後も、ザビエルらが創設したイエズス会の多くの会員が日本を訪れました。

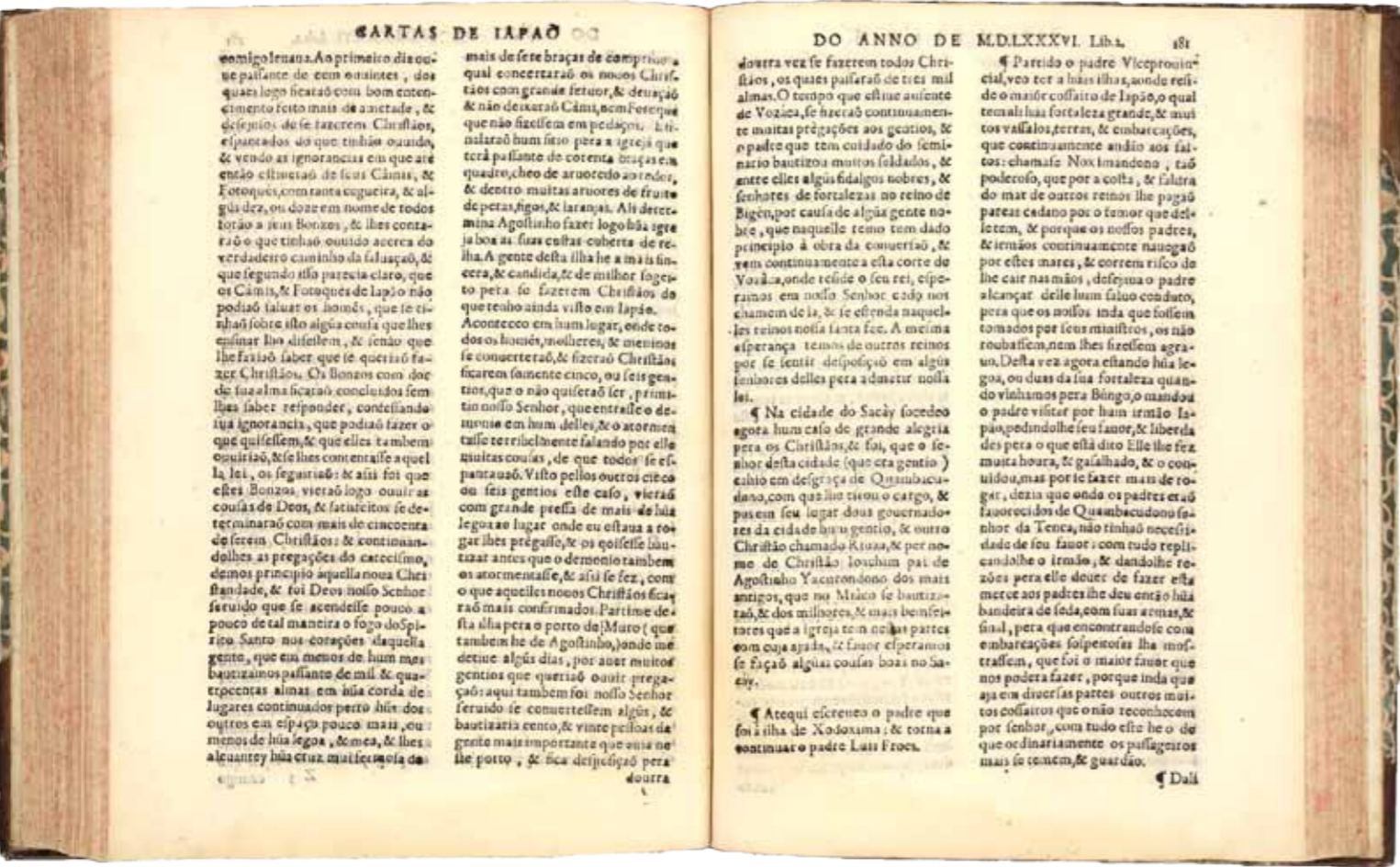
瀬戸内海を通行した宣教師としては、ルイス・フロイス、ルイス・デ・アルメイダなどがありますが、じつは彼ら自身が記した本国ポルトガルへの『報告書』に、中世日本、とりわけ西国の「海賊」の実態を知るうえで重要な情報が記されていました。

なぜ宣教師の『報告書』か

宣教師の『報告書』は、イエズス会の使者本人が書いたものであり、当時の日本の様子が客観的に記されています。また日本人だと記録に残さないありふれた日常も書き留め、しかも九州や瀬戸内海で遭遇した「海賊」（松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史』での表記）のことも記録されています。その「海賊」のうち、「日本最大」と称されたのが村上海賊三家の一つ、能島村上氏です。

このパンフレットでは、ルイス・フロイスが記した『日本史』という史料を中心に、記された九州西岸や瀬戸内海の「海賊」など、海の勢力の姿を見ていきたいと思います。





2. 瀬戸内海の「海賊」と城

ナワバリの象徴—能島城—

近年の発掘調査によって、能島城は海賊たちの平時の活動の場であり、生活の場としての役割をもっていたこともわかってきました。「修道士に尊敬を払い、手厚くもてなし、彼を自らの居城に招待した」という記述が『フロイス日本史』にもあるように、能島城は居所、つまり生活の場所でもありました。このことは出土品からも読み取ることができます。

1586年、堺を出航し、白杵を目指していたルイス・フロイスら一行は、芸予諸島にたどりつきました。そのときの様子が報告書に記されていました。

「やがて我ら一行は、ある島に到着した。その島には日本最大の海賊が住んでおり、そこに大きい城を構え、多数の部下や地所や船舶を有し、それらの船は絶えず獲物を襲っていた。この海賊は能島殿と言ひ、強大な勢力を有していた」(松田・川崎記『完訳フロイス日本史』)



能島城を遠望するフロイス (イメージ)
香川元太郎画・今治市村上水軍博物館蔵

ルイス・フロイス『日本史』原文の複写版を確認すると、「大きい城」は「fortaleza grande」。fortalezaは「要塞」とも訳すことができます。「ある島」は「ilhas」ですが複数形ですので「島々」とした方が良いでしょう。「島々にある」「大きい要塞」「船舶を有し」「能島殿」。これらのキーワードから導き出されるのは、能島城と周囲の宮ノ窪瀬戸の景観ではないでしょうか。能島城は、小島全体を利用した珍しいタイプの城であり、「海城」と言われています。

ルイス・フロイスは、能島から2里ほどはなれたところから使いを送っているため、実際には能島城を見たかどうかはわかりません。この背景写真の景色のどこかで、交渉の結果を待っていたのでしょうか。



能島城跡出土品の一部
15～16世紀 今治市村上水軍博物館保管
能島城跡の発掘調査では、海賊たちが生活で使用した容器や魚を獲るための網のおもりなどが多く発見されました。また武器や武具もあり、平時・戦時の海賊たちの姿を垣間見ることができます。



能島城跡から出土した武器・武具

Partido o padre Viceprovincial, veo ter a huas ilhas, aonde reside o maior cossairo de Iapão, o qual tem ali hua fortaleza grande, & muitos vassallos, terras, & embarcações, que continuamente andão aos saltos: chama-se Noximadono, taõ

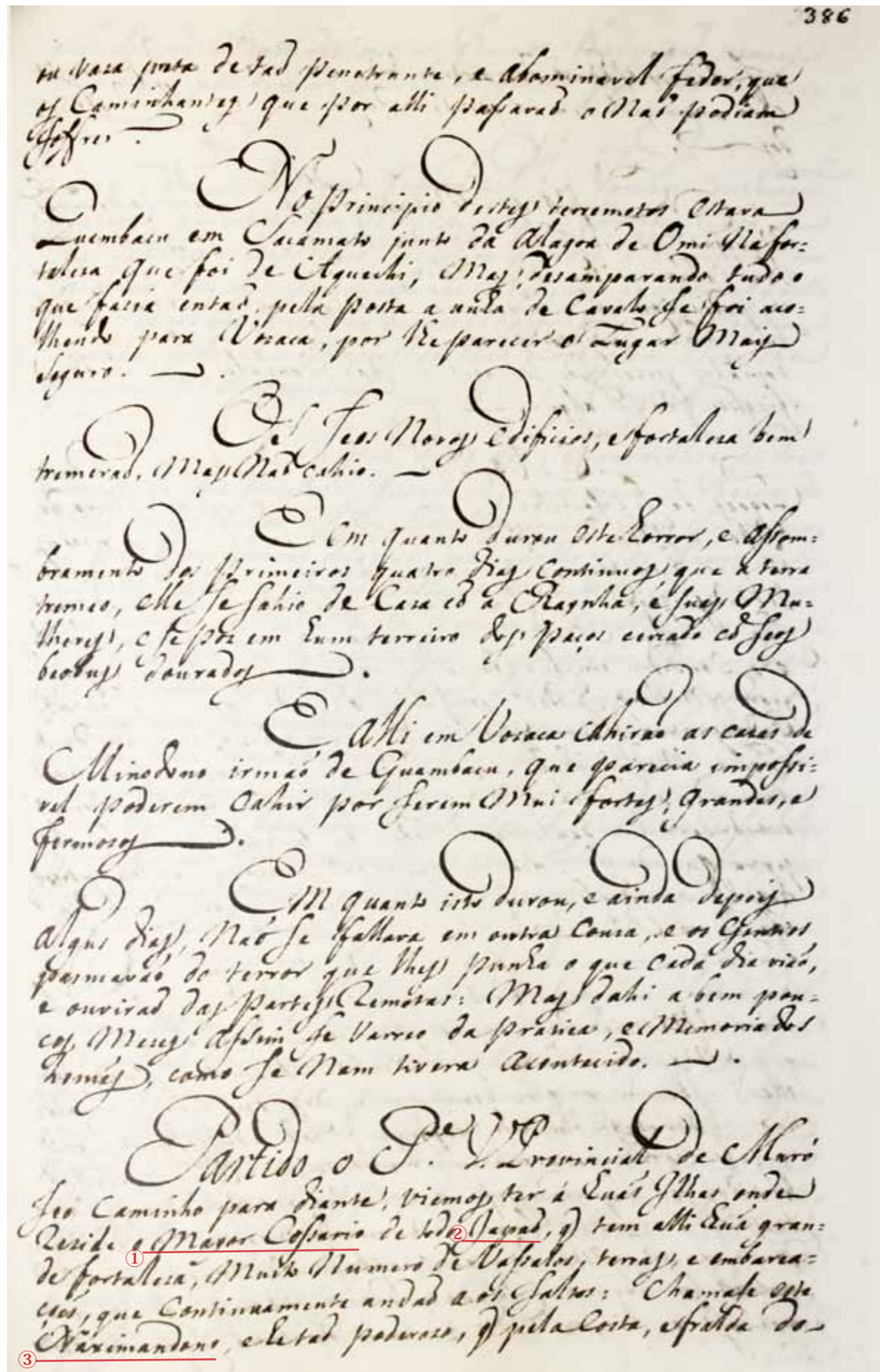
- ① o maior cossairo de Japão
最大 海賊 日本
- ② Noximadono
能島殿

イエズス会日本年報 (1586年の報告書) 上:見開き 左下:部分 (右頁右列の1~7行)
天理大学附属天理図書館蔵・写真提供 赤字・傍線は追記

戦国時代末期 (16世紀) に日本で布教活動を行った宣教師ルイス・フロイスが記した歴史書。原文はポルトガル語。村上海賊の一つ、能島村上氏を「日本最大の海賊」と称しています。



能島城跡から出土した網につける土製のおもり (左) と生活容器 (右)



ルイス・フロイス『日本史』複写版 第二部七十七章
大村市立史料館（松田毅一南蛮文庫）蔵・写真提供 赤字・傍線は追記

宣教師がみた村上海賊

「日本最大の海賊」という言葉は、厳密に言えばルイス・フロイスが呼称したのではなく、その翻訳本である『フロイス日本史』の編著者、松田毅一氏・川崎桃太氏になります。

では、「海賊」の部分の原文はどのような言葉だったのでしょうか。ポルトガル語で「海賊」はpirata(s)（英語ではpirate(s)：パイレーツ）と翻訳されることが多いですが、フロイス『日本史』の「日本最大の海賊」の「海賊」部分は、cossarioと記されています（左頁）。

- ① maior cossario ② japao ③ Noximadono
- 最大 海賊 日本 能島殿

翻訳者の松田氏らは、cossarioはcorsarioの誤写と認識しています（松田・川崎訳『フロイス日本史』）。これは古語で、現代語ではcorsario、さらに英語ではcorsair（コルセア）となります。

コルセアとは一般的に「私掠船」と和訳され、国家や領主から「免許状」を得て敵国の船を攻撃し、積荷を奪う海の勢力のことで、同じ略奪でも、免許状のないパイレーツとは厳密には異なるそうです。英国ではprivateer（プライバティア）がこれに該当します。

そもそも地域が異なるので、海賊とコルセアを同一視することはできませんが、フロイスは、もっとも詳しく能島村上氏のことを説明しているこの場面では、「パイレーツ」ではなく、「コルセア」と翻訳していたことがわかります。

ところで、「日本最大の海賊」の場面での「海賊」は「cossario」でしたが、そのすぐあとの記述「最高の海賊として、その座を競い合ってきた二人」の「海賊」は「piratas」が使われています。次の「全海賊と海国の最高指揮官」での「海賊」も「piratas」。なぜフロイスは2つの用語をあてたのでしょうか。

まだ結論めいたことは言えませんが、他の「海賊」の表記も確認しておく必要があるでしょう。

ここでは能島村上氏の海上活動とは、どのようなものだったのかを紹介します。この一端についても『フロイス日本史』に詳しく書かれています。



能島城跡出土の硯と水差し
今治市村上水軍博物館保管 通行保障状作成の必需品!?

「我ら（同僚）司祭や修道士たちは、このあたりが多数の島嶼であるために絶えず船で通行せねばならなかったし、つねに海賊の手に陥る危険に曝されていたので、副管区長の司祭は、その人物から**通行保証状**をもらえないのか交渉したいと考えた。（中略）能島殿に対して、我らがその交付する署名によって自由に通行できるよう、好意ある寛大な処置を求めた。（中略）彼は、**怪しい船に出会った時に見せるがよいとて、自分の紋章が入った絹の旗と署名を渡した。**（松田・川崎訳『完訳フロイス日本史』）

この「自分の紋章が入った絹の旗」というのが、過所船旗と呼ばれる通行保障状で、これを手にすることによって、フロイスら一行の能島村上氏の領海内における安全な航海が保障されました。

それでは、能島村上氏の領海とはどのあたりなのでしょう。



重要文化財 過所船旗
天正9（1581）年 個人蔵

紋章が入った絹の旗。この資料は雑賀（現和歌山県）の向井氏に宛てたものであるが、同じようなものをフロイスも与えられ、航海の安全が保障されたのであろう。

紀州雑賀之内向井弾右衛門尉
上
天正九年三月廿八日武吉（花押）

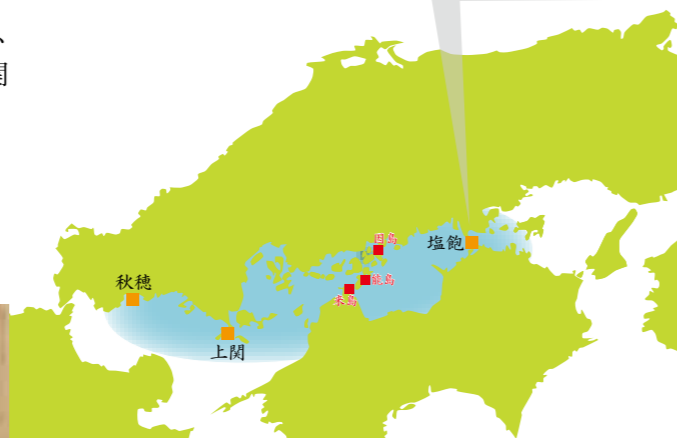
能島村上海賊の生業とテリトリー

海賊の生業とは、自らのナワバリを通る船から、「通行料」を徴収することです。能島城は、そのナワバリを示す象徴として長年にわたり宮ノ窪瀬戸でその存在感を放ち続けました。通行料を徴収する対価として、海賊を一人の同乗させる「上乗り」や、後に「過所船旗」と呼ばれる通行保障状が与えられたのです。

そして、この能島城を基点として、能島村上氏は瀬戸内海各地の重要な港に活動拠点を置きました。その東端は讃岐塩飽（香川県）、西端は周防上関、そして後に秋穂（いずれも山口県）を拠点としていました。つまり、塩飽から上関・秋穂の間の海は、能島村上氏のテリトリーであり、特に塩飽諸島に関しては、宣教師の記録からもわかります。

塩飽の「上乗り」に関する宣教師の記録

- ◆1581年
宣教師の船に能島村上氏が乗り込む「上乗り」の存在を確認すると「丁寧なる挨拶」をして撤退（『イエズス会日本年報』下）
- ◆1581年
「塩飽を過ぎては船は軍用品を取り出して武装した」（『イエズス会日本年報』上）
- ◆1587年
塩飽の港で案内をお願いしている「海賊の頭の僕（しもべ）」一人が到着するまで八日待つ（『イエズス会士日本通信』下）



能島村上海賊のテリトリー
塩飽から周防までが直接的な支配海域

「札浦」

ところで、海賊が通行する船に割り当てる通行料（税）を「関役」や「津公事」などと往時は言いましたが、それらを徴収する港のことを古文書には「札浦」と記されています。「札浦」の存在は能島村上氏だけではなく、「村上吉充讓状」に見られるように、因島村上氏でも確認されています。

能島村上氏の「札浦」は、テリトリーの外でもある筑前国内（北部九州）などにも広がっています。さらに村上武吉から「塩飽嶋廻舟」に対して、大友氏の家臣である本田氏が通行するから、それを妨げないように命じた書状があります（『野間家文書』）。

これらの古文書からわかるように、陸の大名は村上上海賊から税の免除を受け、かつ通行を保障される代わりに、自らの領国内に札浦の設置を認めたと考えられます。

3. 宣教師がみた九州の海の勢力と城

大村湾口を押さえた海の勢力、針尾氏

村上上海賊との比較研究を行うため、九州西岸の海の勢力について調べてみました。なぜなら、村上上海賊と同様に、宣教師の記録に肥前彼杵地域（長崎県）や有明海沿岸の「海賊」がしばしば登場するからです。もっとも、その記され方は村上氏とは異なり、とりわけ深堀氏は悪しざまに書かれています。

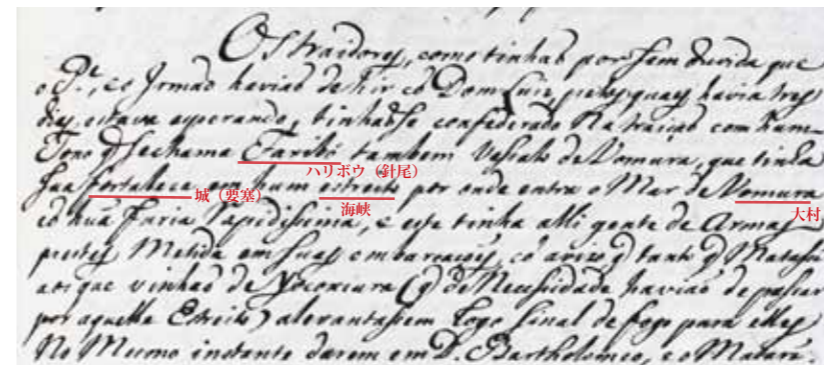
まず取り上げるのは、大村氏の家臣である針尾氏。激しい潮流となる大村湾の入口、針尾瀬戸を望む位置に城を構え、1560年代から横瀬浦で行われていた南蛮貿易を監督する立場にあったと言われています。この針尾瀬戸は、南蛮貿易と信仰の窓口とも言われる横瀬浦と、大村湾をつなぐ唯一の航路で、フロイスら宣教師も頻繁に通過していました。針尾氏が「海賊」と称された史料は見あたりませんが、海辺に城を構え、流通に深く関わる点は、村上上海賊と共通する特徴と言えるでしょう。



横瀬浦の町並み
(一社) 長崎県観光連盟提供

九州西岸（西彼杵・長崎）の海の勢力 関係地図

ルイス・フロイス『日本史』で針尾氏は、Faribo（ハリボウ）と誤って記されており、次のように紹介されています。

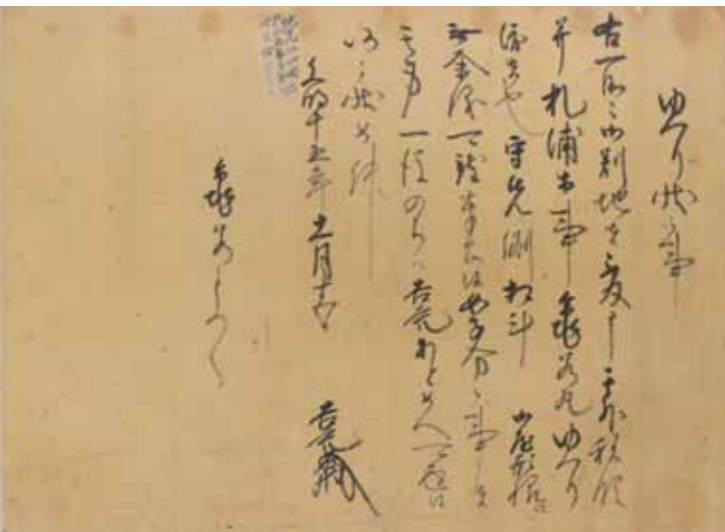


ルイス・フロイス『日本史』複写版 第一部四八章
大村市立史料館（松田毅一南蛮文庫）蔵・写真提供 赤字・傍線は追記

「叛逆者たちは、ドン・ルイスは三日間も伴天連や伊留満を待ったことだから、彼らが彼といっしょに来ることを疑っていなかった。そこで彼らは自分たちの陰謀を成就するために、これまた大村の家臣で針尾という殿と結託した。この殿は、大村湾の海水が極めて激しい潮流となって入って来るある海峡に城を構えていた。」（松田・川崎訳『完訳フロイス日本史』）



大村湾の入口
針尾瀬戸の潮流



村上吉充讓状

広島県重要文化財 因島村上家文書

文明15 (1483) 年

個人蔵・因島水軍城保管

因島村上氏の村上吉充から亀若丸なる人物へ、所領などを譲渡することを伝えたもの。所領などととも「札浦」も譲渡されており、「札浦」が所領などと並ぶような権益であったことを窺わせる。

【書き下し】

譲り状の事
右 所々御判の地は申すに及ばず、そのほか私領ならびに札浦などの事、亀若丸に譲り渡すものなり。先例を守り相計らい、御屋形様へ余儀なく奉公を致すべく候。女子分の事は、その身一期の後は、吉充の跡目へ返すべく候。よって状のごとし。

文明十五年十一月十五日 (吉充) (花押)

亀若丸のへ

針尾城跡の発掘調査

前頁で紹介したように、ルイス・フロイス『日本史』に登場する針尾城。2004年には佐世保市教育委員会によって発掘調査が行われました。

針尾城は小さな浦に面したの丘の上に築かれており、郭（平坦面）は円形で、たったの一つ。郭の山側には、2重の堀切と土塁が巡って守る意識がある一方、海側は開放的です。

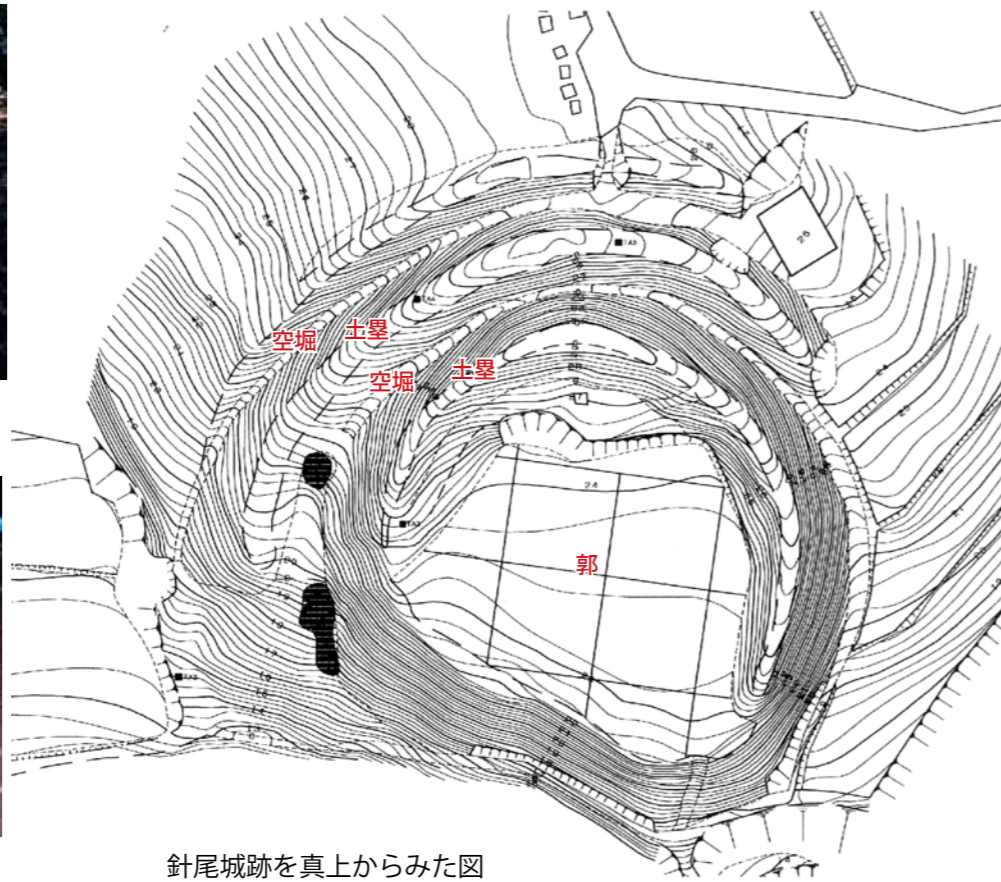
郭の発掘調査では、数回建替えられた建物跡とともに、網につけるおもりなどの生活用具が発見されました。城が針尾氏の生活の場であったことがわかります。また、注目すべきは小さな城でありながらも、中国産陶磁器や東南アジア産の焼き物などが豊富に発見されたことです。ただ量が多いだけではなく、碗や皿以外にも、鉢や瓶などの珍しい器種も取り揃えられていました。発掘調査の成果を見る限り、針尾氏が横瀬浦で南蛮貿易を監督する立場にあったという記述も納得できます。



土塁（どるい）と空堀（からぼり）
佐世保市教育委員会提供



発掘調査された郭（くるわ）
佐世保市教育委員会提供



針尾城跡を真上からみた図
佐世保市教育委員会『針尾城跡』より 赤字は追記



針尾城跡遠景
佐世保市教育委員会提供



タイ産 褐釉壺



珍しい中国産陶磁器



中国産青磁・白磁の碗皿



朝鮮陶磁の碗・皿



中国産青花皿



中国産青花碗



防長（現在の山口県）系
すり鉢の破片



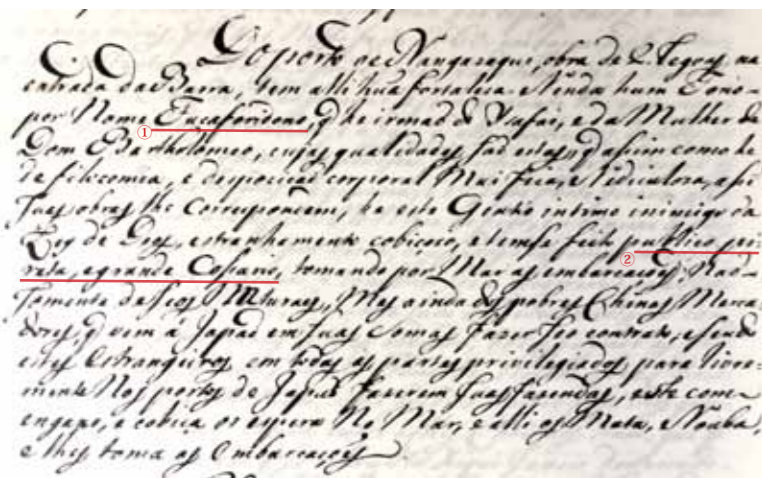
網につける土製のおもり

針尾城跡から出土した 15～16 世紀頃のおもな遺物 佐世保市教育委員会保管

「公然たる海賊」深堀氏

「長崎から二里ほど離れ、湾の入口にあたるところに深堀殿という殿が城と封録を有している。(中略)容貌と体格ははなはだ醜悪かつ滑稽で、彼の所業はまたそれにふさわしい。彼は異教徒で、デウスの教えに凶悪な敵であり、きわめて貪欲で、海上の船舶を捕獲することによって、公然たる海賊であり、しかも大海賊となっている。そしてただに同国人の船ばかりではなく、貧しいシナの商人たちの船まで捕獲する。」(松田・川崎訳『完訳フロイス日本史』)

一読してわかるように、ずいぶんと悪しざまに書かれており、この限りでは、村上海賊に比べて深堀氏は「賊」としての性格が強いです。そして上記「海賊」の原文表記ですが、**publico pirata, e grande cossario**と記されていることがわかりました。つまり「パイレーツ」と、「日本最大の海賊」の原文にもあった「コルセア」が並んで記されており、和訳ではいずれも「海賊」であるものの、原文表記は2種が存在するということになります。なぜフロイスは用語をわざわざ分けて表現したのでしょうか。この問いに対し、現時点でも明快な答えを用意することはできません。



ルイス・フロイス『日本史』複写版
第一部一〇〇章(部分)

大村市立史料館(松田毅一南蛮文庫)蔵・写真提供 赤字・傍線は追記

- ① **Fucaboridono**
深堀殿
- ② **publico pirata, e grande cossario**
公然たる海賊、そして大海賊



深堀遺跡から出土した15～16世紀の中国産陶磁器
長崎市教育委員会保管



俵石城跡遠景
西から撮影

ところで、深堀氏の居城とされるのは標高約350mの山頂に築かれた俵石城とされています。他の海の勢力はこのような高所を選んでおらず、広いエリアの海の動きを監視する意図があったのでは、という指摘もあります。

沿岸部の深堀遺跡の発掘調査では、15～16世紀の中国陶磁器が多く発見されました。「貧しいシナの商人たちの船まで捕獲する」というフロイスの証言を素直に読めば、これらを略奪品と解釈しても違和感はありません。しかし、フロイスは敵視する深堀氏のことをずいぶん悪しざまに記していることから、すべてが真実かどうか、きちんと調べていく必要があるでしょう。

例えば深堀氏の対面である長崎湾の北側を押さえた福田氏は、海上交通の秩序維持を担う領主でもありました。深堀氏にもこうした側面があったのではないかと、という指摘もあり、さらに後世の書物には、深堀氏が領海において「礼物」(通行料)の徴収を行っていた、とも記されています(『直茂公譜考補』)。もし、この指摘や記述が往時の史料などで証明されれば、村上海賊の生業との共通性も見えてくるでしょう。

4. 海の勢力と流通

—九州西岸と瀬戸内海の共通性—

「見近島や能島城の輸入陶磁器の特徴(質・量・割合)が、天草諸島の城の様相と良く似ている。」熊本県天草市の研究者の指摘をきっかけに、日本の「海の勢力」を特徴づける何か共通点を見出せるのではないかと思います。調査に着手しました。

戦国時代の天草には直接的に「海賊」と呼ばれた人々は史料上で確認されていませんが、島々が密集し、海に面した小平野が形成されるその立地から、海を活動の場とする勢力が存在しました。その勢力は一つではなく、総称して天草一揆衆(五人衆)と呼ばれます。近年、天草一揆衆の城の発掘調査が進んでおりますが、ここでは棚底城跡と上津浦城跡の調査成果を紹介します。

ところで、戦国時代の天草に「賊」的な人々がいなかったか、というところではありません。ルイス・フロイス『日本史』には、「口之津へ来ようとして志岐島の近くを通りかかった際、佐伊津という所から出て来た盗賊に襲われた」(松田・川崎訳『完訳フロイス日本史』)という記録があります。この「盗賊」の原文表記はpiratesではなくladrões。つまり「泥棒」です。詳しくは後述しますが、フロイス『日本史』ではこのladrõesを「海賊」と和訳しているところもあります。

天草一揆衆の城 棚底城・上津浦城

棚底城は、天草諸島最高峰の倉岳の南麓にのびる尾根の先端に築かれました。眼下に小平野があり、その先に八代海を望むことができます。海からの距離は最



棚底城跡遠景
倉岳山頂から



九州西岸の海の勢力関係地図

短で約1kmあり、直接的に海と接しているわけではありませんが、城主は天草一揆衆(五人衆)などと呼ばれる在地領主であり、海と深く関わりがありました。

棚底城は全長335mにもおよび、8つの主要な郭からなります。山側の北西端が堀切で分断されています。横堀を多用した重厚な防御構造が特徴です。天草一揆衆は領地をめぐる激しい攻防を繰り返してまいりましたので、戦への備えが必要だったのでしょうか。一方、海側には土塁などはなく、非常に開放的でした。このことは針尾城や瀬戸内海の海城とも共通します。郭では梁間3間×桁行5間以上の大型の掘立柱建物跡、Ⅱ郭でも4棟程度の掘立柱建物跡が確認されました。

上津浦氏の居城である上津浦城は、天草上島にあります。現在は湾内が埋め立てられていますが、当時は海に面していたと考えられています。独立した2つの隣り合う丘陵につくられ、それぞれ北の城、南の城と呼ばれています。棚底城と同じように、人々が暮らした痕跡や高級な陶磁器が発見されています。天草諸島を代表する城の一つです。



土塁と横堀（よこぼり）

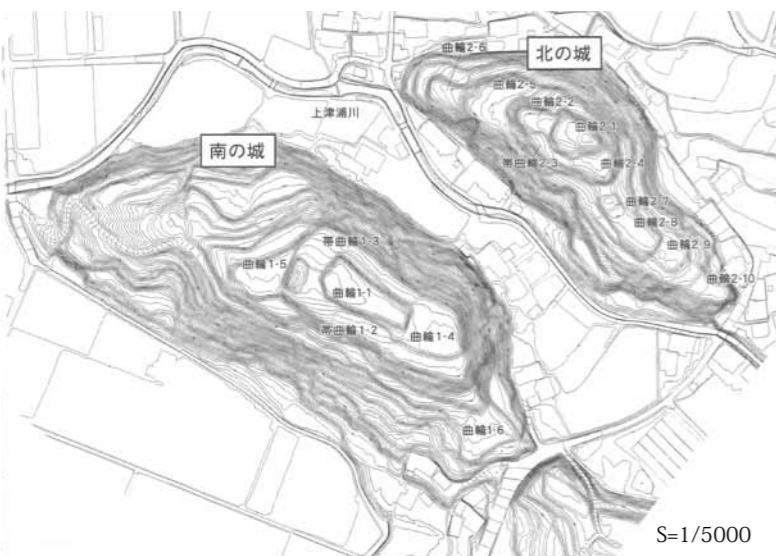


郭（建物があつた平坦面）



棚底城跡を真上からみた図

棚底城跡パンフレットより 天草市提供



上津浦跡を真上からみた図

天草市教育委員会編『上津浦城跡1』より



当時は海

有明海側からみた上津浦城跡

天草市教育委員会編『上津浦城跡1』より

豊富な海外の陶磁器

棚底城の特徴は、中国や東南アジア産の陶磁器が大量に出土していることです。出土品全体に占めるそれらの割合は56%。能島城では約5%ですが、それでも多いと研究者は言います。棚底城における陶磁器の多さが際立っていると言えるでしょう。ちなみに針尾城は、狭い空間から4000点以上のものが発見されており、そのうち30%以上が輸入された陶磁器でした。九州西岸の海の勢力は輸入品を豊富に携え、生活に使用していたことがわかります。

棚底城では、中国産の陶磁器がもっとも多く、加えてタイやベトナム産が出土していることも特徴です。天文24（1555）年には、16隻の「八代船」が渡唐船として出帆するなど、中国と活発な貿易を行っていたことがわかっています。棚底城の出土品から、外海と直接つながる海の勢力の姿を見ることができます。



上津浦城跡から出土した

15～16世紀のおもな遺物 天草市保管



中国産陶磁器（青磁・白磁・青花）の碗・皿



ベトナム産 青花碗



珍しい中国産陶磁器



タイ産 黒褐釉壺

棚底城跡から出土した15～16世紀頃のおもな遺物 天草市保管

村上海賊は商人？

能島城の北側約1kmの場所に、見近島という小島があります。江戸時代の絵図に「取出」の記載があることから、「見近城」「見近島城」と呼ばれてきましたが、実際は明らかな城の痕跡が見られないこともわかってきました。1980年から発掘調査が行われ、15～16世紀中頃の中国産陶磁器が大量に発見されたことで、村上海賊と流通の関係が研究されるようになりました。

見近島から発見された中国陶磁器には次の特徴があります。

- ①同じ絵柄、形、大きさのものが数点から数十点、まとまっている。
- ②高級品や珍しい品が戦国大名の城館並みに豊富。
- ③流通量が少なく、他の遺跡ではあまり出土しないものまである。

これらのことから、能島村上氏が瀬戸内海の物流にも関与したと考えられるようになりました。ただ、村上氏自体が商人として物資を運んだのか、あるいは商人の船を護衛したのか、ただ寄港地を提供しただけなのか…。具体的な関わり方は、まだ謎に包まれています。そして、入手した陶磁器を使った場所が能島城です。村上海賊は、瀬戸内海を支配することで、海外の文物や情報を豊富に得ていたのでしょう。



見近島（城跡）から出土した16世紀中頃の中国産陶磁器 今治市村上水軍博物館保管

見近島（城跡）遠景
北上空から



西国の「海賊」(海の勢力)に通じるもの

伊予河野氏の守護所である湯築城(松山市)の家臣団居住区の発掘調査でも多くの中国陶磁器などが発見されました。重臣であった来島村上氏が河野氏の海上活動にも深く関与したと考えられています。

能島村上氏の能島城や見近島との共通点は、中国陶磁器(青磁・白磁・青花)が周辺の他の遺跡に比べて突出して多いことなどが挙げられます。やはり、村上海賊が瀬戸内海の物流に深く関わっていたのでしょう。

九州西岸の海の勢力との共通性と言えば、一般には列島に流通をしない、華南三彩と呼ばれる珍しい中国の陶磁器や、東南アジア産の陶磁器が発見されていることです。地域は違えども、「海賊」などの西国の海の勢力が海外の文物の流通に深く関与し、その結果、関連する城跡などから中国陶磁器などが多く出土しているのではないかと考えられます。



能島城跡から出土した中国産青釉小皿と華南三彩水注
今治市村上水軍博物館保管



湯築城跡
湯築城資料館提供



河野氏の重臣 村上通康
安楽寺蔵



湯築城跡から出土した海外産の珍しい陶磁器
愛媛県教育委員会蔵(一部が湯築城資料館保管)

5. 津々浦々の「海賊」

住民たちは海賊であり、略奪で身を立てている

「その海辺のちょっとした漁村の人々に対して説得が始められた。だがその住民たちは海賊であり、略奪で身を立てているので、次のように答えた。「デウスの教えは正しくて神聖なものに思えるし、お前さんたちの勧めも大変有益と考えられ、その親切には心から感謝している。だが身共は貧しく、盗みを働かずに食べていけない。とりわけ今は戦が行われており、このどさくさに便乗すれば、そのための絶好の機会が与えられることだから」と。(松田・川崎訳『完訳フロイス日本史』)

有明海に面した島原半島の要港、口之津の近くの加津佐での布教活動の記録であり、漁村の海賊の様子が記されています。原文の表記は piratas (左写真最上段) です。遡ること 1570 年頃の有明海では、海賊が横行していたようです。

「船はよく武装し、多数の銃器を携えたる口之津の人を載せぬたり。蓋しこの十四レグワの間は海賊常に横行せるがゆえなり。」(『イエズス会士日本通信』下)

実際に、宣教師が襲撃される事件も発生しています。

「岸に沿い進みし時、海賊の船数十艘我等を襲い、わが船小なりしをもって二艘のみ我等に迫りたり。船には何ら防御なかりしをもって、彼等が我等の携えし物、すなわち冬の衣服を悉く奪うことを能うざりき。(中略) 船の道具、すなわち櫂、網、そのた綱具および筵にいたるまで悉く奪い、少しの水をも残す事なかりき。」(『イエズス会士日本通信』下)

海賊の危険とか嵐などは、きわめてありふれた通常の出来事

「堺から豊後に戻ることになって後、我らは少なからぬ危険と不安を味わうことになった。帰路は盗賊の危険があったのと、毛利の領地を通過しないために、往路とは別の道を迂回することとなり、日本の島々の外側を通らねばならぬこともあって、一ヶ月を費やした。(中略) すでに豊後に接近していた時に、一隻の海賊船が我らを目指してやって来た。(中略) だが海賊の危険とか嵐などは、これら日本の島々の間を航海する者には、きわめてありふれた通常の出来事であって、それらの危険を免れて無事に旅を終えた者にとっては、ただ主なるデウスに対する感謝の念があるのみである。」(松田・川崎訳『完訳フロイス日本史』)

1581年に堺から豊後へ戻った際のこの記録に記されているように、フロイスら宣教師は、村上氏や深堀氏などの領主クラスの「海賊」のほかにも、日常的に津々浦々の「海賊」と遭遇していたようです。

上記に登場する盗賊・海賊の表記を原文で確認したところ、いずれも ladrões (現代ポルトガル語では ladrões)、つまり「泥棒」で、パイレーツでもコルセアでもありませんでした。これで、松田毅一氏、川崎桃太氏が翻訳した『フロイス日本史』に登場する「海賊」の原文表記には、piratas, corsario (cossario と誤写)、ladrões、の3者があることがわかりました。

ちなみにルイス・フロイス『日本史』第二部七七章(翻訳本の六〇章)には、ladrões piratas という表現があります。直訳すると「泥棒の海賊」となりますが、翻訳では「海賊」の一語になっていました。

豊後水道

探求はつづく・・・宣教師の記録と城跡の発掘調査からみた西国の海賊

瀬戸内海における戦国期の村上海賊は、「賊」としてのニュアンスを残しつつも、瀬戸内海の海上交通を支える存在であり、理不尽に船を襲ういわゆるパイレーツとは異なる存在でした。能島城は長きにわたって生活の場としても使われており、戦時のみならず、平時における海上活動の拠点でもあったと考えられます。

村上氏と同じく、ルイス・フロイス『日本史』に登場する九州西岸の海の勢力も興味深い存在でした。とくに長崎の深堀氏は、略奪を行う海賊として悪しざまに記されています。同書を読む限りでは、九州の海賊がもっとも「賊」としての性格が強いと言えるでしょう。ただ、フロイスの主観で述べられている部分も想定できるので、その実態についてはまだまだ追究の余地がありそうです。

また津々浦々で海賊や盗賊と出会うことはありふれた出来事であった、と書かれていることも注目できます。それらの海賊の原文表記は piratas や ladroes. corsario と記される場面もあった能島村上氏とはどう違うのでしょうか。ただ一方で、「海賊」は日本独自の勢力であり、そもそも地理的・歴史的背景の異なるパイレーツやコルセアにその姿を重ねて評価することはできません。このことを念頭において、海賊の実態をさらに研究する必要があります。

針尾氏や天草五人衆も当地を代表する海の勢力であり、その本拠とされる大村湾入口をにらむ針尾城や、八代海を望む棚底城の発掘調査成果が示されました。いずれも海側は比較的開けた構造であり、海辺に立地する瀬戸内海の海賊の城とも共通します。海の勢力の城は、海側の眺望を意識したのでしょうか。また、城内での人々が暮らしていたこととや、質・量ともに豊富な海外の陶磁器が出土していることも特徴としてあげられます。

九州西岸の海の勢力が外海と繋がり、流通に深く関与したことを出土品から想像することができます。これらのことは、村上海賊の物流拠点とされる見近島や、中国陶磁器などを多く手に入れていた能島城や湯築城と共通しています。海外との貿易や国内の流通における「海賊」の役割。その具体像はいまだ明らかではなく今後も探求は続きます。



豊臣秀吉法度 東京大学史料編纂所蔵 天正16(1588)年
天正16(1588)年7月8日、豊臣秀吉は全国の大名にいわゆる海賊停止(禁止)令を出した。現在でも多くのものが伝来しており、この写真は薩摩国の島津家のもの。

6. 「海賊」の終焉

四国・九州平定を終えた豊臣秀吉は、天正16(1588)年、諸大名に海賊停止(禁止)令を發布。船舶を襲い、人や物資を略奪する賊船行為を禁止するとともに、船舶従事者の把握を意図したものとされています。

この停止令が出される前、能島村上氏は家中の者が賊船行為をしたとの疑いを豊臣政権からかけられ、取り調べを受けました。村上元吉は、豊臣政権の有力者を通じて働きかけましたが、豊臣秀吉から「言語道断」の「曲事(=悪い事)」と見なされてしまいます(『屋代村上家文書』)。

海上の秩序をも自らのもとに編成しようとする天下人・豊臣秀吉の政策は、海賊として活動してきた能島村上氏にとっては厳しいものでした。

海賊停止令によって、秀吉の標的となった海賊がもう一人いました。深堀純賢です。

「国々海賊・盗賊無之様被仰付候」ところ、肥前国高来郡内の深堀は、海端に位置していることから「大唐・南蛮并諸商売船」の妨げをしている(『深堀文書』)と見なされ、居城は破却、領地は龍造寺氏へ渡りました。長崎を直轄地として海外交易の振興を図る秀吉には、邪魔な存在であったと考えられています。

フロイスから「日本最大の海賊」あるいは「公然たる海賊、そして大海賊」と称された能島村上氏と深堀氏は、秀吉の政策によって自由な海を奪われていったのです。



岡島城跡

※岡島城跡は私有地につき立入禁止です

- 定
- 一、諸国於海上賊船之儀、堅被成御停止之處、今度備後・伊予西国之間伊津喜嶋にて盗船仕之族在之由被聞食、曲事ニ思食事、
 - 一、国々浦々船頭・獵師いづれも舟つかひ候もの、其所之地頭・代官として速相改、向後聊以海賊仕ましき由、誓帛申付、連判をさせ、其国主とりあつめ可上申事、
 - 一、自今以後、給人・領主致由断、海賊之輩於在之者、被加御成敗、曲事之至所知行以下末代可被召上事、
 - 右条々堅可申付候、若違背之族在之者、忽可被処罪科者也、
- (豊臣秀吉)
天正十六年七月八日(朱印)

コラム 港町尾道と「海賊」

尾道市街地の南、向島北部の半島状の小丘陵には岡島城跡がありました。現在は、向島と陸続きですが、これは近代の埋立によるもので、江戸時代までは小歌島という小島でした。岡島城には、「関の大將」と呼ばれた「海賊」がいたことが記録に残っています。

京都東福寺の梅林守龍が記した「梅林守龍周防下向日記」には、天文20(1551)年に竹原近辺で、「関の大將ウカ島賊船十五艘」とやり取りし、過分の礼金を払うことで通過を許されたという記録があります。これが岡島城にいた「関の大將」であり、尾道近隣の航路を監視していたのでしょう。

村上海賊の時代、港町尾道は足利将軍家や備後守護山名氏の庇護のもと、瀬戸内海や海外交易の中継地として繁栄し、多くの人・物・財が集まっています。港町尾道の入り口を抑えることで、効率的に航行する船を監視していました。

ただ、そうした「関の大將」の活動は、村上海賊や港町尾道を抑えたい毛利氏・小早川氏にとっては障害となったようで、天文23年(1554)頃に因島村上氏と結んだ小早川隆景によって滅ぼされています。その後、岡島城は向島とともに因島村上氏の支配下になりました。

このパンフレットを作成するにあたり、下記の機関より、多大なるご指導とご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。なお、多くの個人の方々にも協力を賜りましたが、掲載は控えさせていただきます。心から感謝申し上げます。

天草市 安楽寺(一社) 長崎県観光連盟 愛媛県教育委員会 大村市立史料館 佐世保市教育委員会
天理大学附属図書館 東京大学史料編纂所 長崎市教育委員会 湯築城資料館

またルイス・フロイス『日本史』複写版の翻字・解釈については田中謙(今治市村上水軍博物館)が担当しましたが、その際に、森脇優紀氏(東京大学)に多大なるご指導・ご教示を賜りました。記して感謝を申し上げます。

なおこのパンフレットは、2018年度に村上海賊魅力発信協議会が刊行した日本遺産村上海賊調査研究成果報告書『中世日本の海賊と城』(文化庁支援事業)および、同成果報告巡回展『中世日本の海賊と城Ⅱ宣教師がみた西国の海賊』をベースとして作成しております。参考文献は紙面の都合上割愛しておりますので、詳細は前掲報告書をご参照ください。